

## 岐路に立つ世界遺産～表面化する矛盾と課題

朝日新聞大阪本社 編集委員 中村俊介

はい。朝日新聞大阪本社の中村といいます。45分ぐらいですかね。よろしくお願ひいたします。時間もないのでちょっと少々急ぎ足になるかもしれませんけれども。私は30年ほどでしょうか、朝日新聞というところで、東京、福岡、そして大阪で、点々と移動しながら、歴史あるいは考古学、さらには文化財、そして世界遺産、このようなことを軸に取材をしてきました。東京時代は文化庁とかも担当したことがあるものですから、そういう面もあって、20年ほどですか、世界遺産も見てきました。それで、いろいろと幸いなことに、私が行く先々で世界遺産が推薦され、九州は立て続けに3回、世界遺産委員会、世界各地であるんですけれども、そこにも3度ほど実際に現地で取材させていただきました。



私は研究者ではありません。新聞記者、マスコミの人間なので、むしろ皆さんと同じような、目線で世界遺産をとらえてきました。そういうことをやっていますと、世界遺産、素晴らしい。こっちの古市、百舌鳥、非常に素晴らしい。これもいろんなところで、そのすばらしさは、皆さん、お聞きになっていると思います。でも、取材活動をしておりますと、ちょっといろんな課題が見えてくる。あるいは、もう来年で世界遺産条約も50年、半世紀になろうとしていると、いろんな制度劣化といいましょうかね、矛盾みたいなものが噴き出してきています。そういうものが、とても目につくようになっている。けちをつけるわけではなくて、そういうことに直面すると、そして向き合うということが、さらにいろんな資産、遺産を、公正に、よりよく守られていくことになるんじゃないかなと思って、あえてですね、今日は、あまり普段、皆さんが見ることのない世界遺産の課題というものを、少しだけ紹介してみようと思います。

これはどこだか、おわかりでしょうか。とても綺麗ですね、山の中ではございません。これはお隣、堺の、いわゆる大山古墳、仁徳陵古墳ですね（図1）。仁徳天皇陵、ご存知のように宮内庁の管理、陵墓ですので、ここに入ることはできません。ところが、今月、先月かな。もう本当にひと月ほど前に、今ここで、新聞ニュースでご存知の方もいらっしゃると思いますけれ



図1 大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第1堤より墳丘を臨む

ども、堺市とそれから宮内庁の合同調査がございまして、その結果がプレスにも公開されました。そして私も見ることができました。とても貴重です。普段は、これは、奥は墳丘なんですけれども、この角度では見れないところなんですね。第1堤というところまでしか入れない。ここで調査があったんですけども、ここから覗くことができました。とても綺麗ですね、やはり人が踏み入れない、立ち入れないので、自然がよく残っているんです。秋の紅葉も綺麗ですし、エメラルドグリーンの濠の水がとても綺麗ですね。

ここで何をやったのかといふと、これはトレーニチというものを堤上に入れまして、その状況を調べる（図2）。これを見ると、真ん中に、さし示している、これは何かといふと、これが円筒埴輪といふものです。この筒状の土管状の、樽のような埴輪が、びっしりと列をして、この堤の上に2列になって、墳丘側、そして墳丘の外側に2列になって、大体、間は30メートルぐらいですかね、並んで走っているんですね。これ全体取り巻くということになりますと、何十万本という世界になると思います。これが円筒埴輪。しかし、上からですから、頭のほうを欠いているわけで、よくわからない。本当に土管なのかなと思いますけれども。

これ、実はちょうどつい1週間か2週間、1週間前ですか。お隣、峯ヶ塚古墳ですね、これも世界遺産の中ですが、峯ヶ塚古墳の現地説明会がありましたので、私もたまたま見に行つたんですけども、同じ円筒埴輪、これ円筒埴輪ですね（図3）。おそらく、こっちのほうから、造り出しから落ち込んだんじゃないでしょうか。横になっています。さっきのは頭の方、口の方しか見えませんでしたけども、これすごくよくわかりますね。こんな形してたんだ。

同じ世界遺産の中でも、このように見れるところと、そして先ほどの陵墓だから立ち入



図2 大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第1堤で検出された円筒埴輪



図3 峰ヶ塚古墳 墳丘北側クビレ部 造り出し付近の発掘調査

れない、なので普段は見れないというところがある。同じ世界遺産なのに、やっぱり不思議だなあと思ったところですが、このように、補完するような形で、円筒埴輪の姿とか、古墳の状況というのは、比較検討してわかる良い例だと思います。

これは、先ほどの元に戻りまして、仁徳陵古墳、このさっきこちらのほうに円筒埴輪の列があったんですけれども、間を調査してみると、びっしりと拳大ぐらいの大きさでしょうか、敷石があるんですね（図4）。これも、また大変な、おそらくこれが、3ヶ所、4ヶ所のトレンチで、全部そういう状況なので、堤

上を、こういうびっしりと敷石がめぐっていたと考えられる。これも、また莫大な労働力が課されていたということになりますね。こういうこともわかってくる。

このように、同じ地元の百舌鳥、そして古市の中でも、これに、この特殊性なんですけれども、やはり宮内庁管理の立ち入れない陵墓としての場所がある一方で、誰もが立ち入れるというわけではないんですけども、比較的見やすいというような、公開されている、あるいは公開されていない古墳が両方共存してるというのが、この百舌鳥・古市古墳群の特徴だと思います。

実は、ここからですけれども、今の話は、ごく最近の例でお話したわけなんですが、皆さん、世界遺産と言いますと、多分こういうものを思い浮かべると思います（図5）。これはドイツのケルンの大聖堂です。これ、私、若き日の私なんですけども、ちょうどこの地下で地下鉄の工事がありまして、ここにはローマ時代のその遺構がたくさん眠っているんですね。オペラの取材で行ったんですけども、ついでにこの文化遺産の取材もしてきました。この巨大なケルンの大聖堂、黒々として、なかなか勇壮ですけども、これも何やら、大気の酸性雨かな、何か煤がこびりついた結果、黒くなってしまったという、これも気象変動とかにも関

伝仁徳天皇陵第1堤上の敷石。  
さて次は、  
地元、誉田御廟  
山古墳（伝・応  
神天皇陵）？



図4 大山古墳（仁徳天皇陵古墳）第1堤表面で検出された敷石

定着した世界遺産人気  
その一方で.....



図5 世界各地の世界遺産  
富士山（日本）、アンコール遺跡群（カンボジア）、  
ケルン大聖堂（ドイツ）

係するような話なのかもしれません。

そして、これはアンコール、さきほどの下田さんのお話にあったカンボジアのアンコール遺跡群の、バンテアイ・スレイかな、どの寺院だったかちょっとわかりませんけれども、ここでも一見やっぱり素晴らしいです。素晴らしいけれども、実はよく見てみると、雨で。これ砂岩ですよね、砂岩ですから意外と比較的もろいんですね。経年劣化に加えて塩害。そして、酸性雨とかもよく言われていますね。そして、何よりもここはカンボジアのポルポト派との内戦があった舞台ですので、いたるところに、銃の、戦争の傷跡があります。これも、やはりその遺産を脅かしているような要因です。

これはご存知、富士山、文化遺産ですけれども、富士山は大丈夫だろう…。ところが、やはりここでも多くの人が登るわけなんで、いろいろとオーバーユース、もう人が来すぎるというような、いろんな弊害が起こっているようです。ですから、大なり小なり、やはり危険に脅かされてるということですね。

ごく最近の例を言いましょう、私も行ったところです。これはアフガニスタンの中部にありますバーミヤン（図6）。ここはですね、仏教遺跡です。まず、私はこれを2006年に行ったんですけども、こちらに巨大な38メートル東大仏、これ釈迦仏と言われていますね。そしてこちら、これはさらに大きい55メートルの西大仏、これは弥勒と言われています（図7）。この間に700とか800とか、もう幾つもの石窟がありまして、ここに鮮やかな壁画が描かれていました。いましたが、2001年、21世紀の一番はじめ、最初に、このときに実権を握っていたタリバン、イスラム主義勢力タリバンが破壊してしまいました。ご存知のようにイスラム教は偶像崇拜を嫌いますというか拒みますね。ということで、こういう大仏があるというのは、けしからんということなんでしょう。破壊してしまったわけです、ダイナマイトで。これがこの写真なんですけども、これがありし日の西大仏ですね。足もある。大体作られ

暗雲は再び……バーミヤン（アフガニスタン）



図6 バーミヤン（アフガニスタン）

在りし日の西大仏と  
2006年の西大仏と



図7 バーミヤン西大仏

たのが、もう 1000 年ぐらい経ってますので、7 世紀と言ったかな。5 世紀か 6 世紀か、そのくらいですね。ですから、悠久の時間を経過しているので、ある程度やはり壊れますけれども、それでもこのように残っていた。ところが、21 世紀のたった 1 日、一瞬で、1000 年残ってきた、この大仏が跡形もなく吹き飛ばされてしまった。イスラムの時代になってもずっと残ってきたわけなので、ある程度、その愛着を持って、イスラム教といえども一緒に共存してきたわけなんですけれども、<sup>きょうあい</sup>狭隘な考え方の犠牲になってしまった。今の状況はこのような状況です。まだ、いっぱい岩が転がっているんですね。これはやはり人災、戦争による被害です。

それで、これはこの中の一つの、バーミヤンの中の洞窟の、石窟の一つなんですけども、ここ、丸く抉られていますね（図8）。これは壁画を切り取った跡です。この切り取られたものが、こちらどこあるか。綺麗な仏様が描いてありますけれども、実はこれ日本の中に入ってきていたんですね。それで、もうお亡くなりになりました、有名な平山郁夫画伯が、文化財赤十字活動ということをずっとやってらっしゃいまして、この平山さんのもとに救出されたのがこの壁画、これとこれは、ちょうどぴったりと合う。つまり、この壁画も、何も戦争だけではなくて、やはり世の中が混乱すると、これを丸く切り取って、そして闇のルートで国外に流出して、そして高値で取引される、このような、そのお金目的の、闇の流出文化財というのもたくさんあります。

これもまたバーミヤンですけれども、こちらは、やはり、足場が組んでいるから、ここは何窟だったかちょっと忘れましたけれども、修復作業中の窟だったと思いますが、この



図8 バーミヤン石窟内壁体の仏教絵画



図9 内戦で破壊された仏像（カーブル博物館）と洞窟内の銃創



うになかなか安定しない。非常に危険な状態になってきまして、しばらくその修復チームも入れないという状態がずっと続いております。

そういう中で、今年の夏ですね、ついこの間、再びタリバンが実権を握ってしまいました。彼らには彼らの言い分があるのかもしれませんけれども、やはりどうしても私どもの脳裏を横切るのはバーミヤンの大仏の爆破、文化財は大丈夫だろうか。人の命はもちろんですけれども、文化財はまた壊されるんじゃないだろうか、という悪夢がよみがえりました。

それで、かつてバーミヤンの地に立った人間として、このような新聞記事も書いてみたりはしていたんです（図10）。こう考えてみると、やはりその文化遺産の最大の敵というのは、戦争とか、地域紛争とか、ですよね。先ほどの大仏も1000年も生き長らえてきたのが、一瞬で吹き飛ばされてしまう。とても悲しいことです。

これカーブル博物館、この博物館の前に、実はこういう石碑があるんです（図11）。まだ、今もあるようです。なんて書いてあるか。「A NATION STAYS ALIVE WHEN IT'S CULTURE STAYS ALIVE.」（ア ネイション ステイズ アライブ ウエン イツツ カルチャー ステイズ アライブ）、つまり、文化が生き残れば、その国もまた生き残るよ、というような、本当教訓めいた文言だと思います。まさに、今タリバンもね、昔ほど過激じゃないようですので、大丈夫かなと思っているんですけれども。ぜひ国として、国際社会で認められたいのならば、こういう文化財、文化を大切にしてもらいたいなと思っております。

このようにですね、今の戦争の一番悲しい部分でしたけども、他にも文化財を危機にさらしている要件というのはたくさんあります（図12）。例えば、気候変動ですね、もちろん温暖化、そして、それに伴う環境の変化、酸性雨とかですね。あるいは、水面の上昇とかもあると思います。温暖化になれば、小さい南太平洋の国々なんていふのは、いっぱい文化遺産もあるんですけれども、やはりその海面が上がってしまえば、全部それも駄目になっちゃう。これもやはり、気候変動の影響になりますよね。

そして、火災、自然災害、例えば、具体的にはやはり、自然災害といえば、地震ですね、我々としては。そして水害もありますし、台風もあります。これ後で、具体例をお見せしましょう。

それから先ほど言いました、戦争、それから地域紛争。そして、地域コミュニティの崩壊と維持困難、これどういうことなのかというと、遺産を守るっていうのは、やはりその地元の皆さんのが愛着の気持ち。その地元の方々が、理解を示してくれないと、遺産というのは守れません。しかし、今、どんどんどんどん過疎化が進んでいますね。そして、地域意識も少なくなってきてるように思います。そうなりますと、当然地元の財産にも愛情もなくなっていく、そういう状況の中で遺産を支えられていくんだろうか、という問題があります。

それからもちろん開発による景観の破壊、それから観光化に伴うオーバーキュースや変

質。どういうことかと言うと、先ほどの富士山もそうでしたけれども、私が昔行った、これは自然遺産ですけれども、縄文杉、屋久島の縄文杉ですね、そこもやはり10時間かけて往復したんですけれども、世界遺産になると、たくさん人が来ます。ふん尿の問題、トイレも少ないので、そして縄文杉、巨大な杉ですけれども、根っこをみんな踏みつける。縄文杉だけではありませんけれども、人が踏むことによって、どんどん木が弱くなってしまってしまう。これもやはりオーバーユースの問題ですし、白神山地とともに、入ってくる人たちのその靴とかに本来はない植物の種がついていたりして、生態系が乱されている。これ、ハ丈島でもそうですね。そういう問題があります。

それから、後で言います、やはり政治的介入とか外交摩擦とか、こういう国家間の、本当に学術以外のですね、問題はたくさんあるんですね。それから、登録件数の増加等に伴う管理の不徹底、新規候補の的確な評価審査の難しさ。なかなか難しそうですけども、今、現在、世界遺産というのは1154ですね、1000件突破します。そうなりますと、やはり数が多くなればですね、管理もなかなかうまくいかないというところもあります。お金もかかりますよね。その管理の不徹底。

あと、新規物件を登録しようとしても、もうこれだけ多くなると、なかなか、こうローカルな、もう地元の人しかわからないようなですね、物件がたくさん出てきます。そうなりますと、文化遺産を審査する諮問機関は、イコモスというんですけれども、皆さん、専門家です、専門家ですけども、とても全部すべて網羅しているわけではありませんので、なかなかこの価値がわかりづらくなってくる。そういう問題もありそうです。

そして、私、一番大きいと思うのは、この現実社会との条約理念のずれですね。言うまでもありませんけれども、世界遺産条約というのは、人類資産、遺産を後世に渡そうと、これが一番の目的です。ところが、経済、あるいは観光、地域活性化、これ大事、とても

## 世界遺産を襲う課題の数々

- 気候変動や温暖化と、それにともなう環境の激変（酸性雨など）
- 火災・自然災害（地震・水害・台風……）
- 戦争・地域紛争
- 地域コミュニティーの崩壊と維持の困難化
- 開発などによる景観の破壊
- 観光化にともなうオーバーユースや変質
- 政治的介入や外交摩擦など国家間問題の軋轢
- 登録件数の増加にともなう管理の不徹底、新規候補の的確な評価・審査の難しさ
- 現実社会と条約理念のズレ

図12 世界遺産を襲う課題の数々

いいことだと思うんですけれども、それがむしろ後世に手渡すという、本来の目的を凌駕し始めている。そこに、やはりずれが起こってきているわけです。具体的にはたくさんありますけども、やはり、これは、バランスが必要なんだなとは思います。観光も、観光客が来れば、保護意識は高まりますよね。でもそれを越えすぎて、オーバーユースになってしまふといろいろと難しい面が出てきます。

はい。具体例をとって、いくつか言いましょう。最近の例ですね、一昨年、私が大阪に来たのは一昨年なんですけれども、2019年、パリのノートルダム大聖堂が燃えました（図13）。行かれた方も多いかもしれません。世界遺産、これはもう、誰が何と言っても、パリに訪れる人は誰でも行くところなんですけども、そのような世界遺産条約に厚く守っていても、燃えるものは燃えてしまう。形があるものが壊れてしまうのは、仕方がないんですけども、やはり残念なことですね。



図13 ノートルダム大聖堂の火災

2019年春、ノートルダム大聖堂（パリ）が火災に！

世界遺産だって被災する

2019年10月31日未明、琉球王朝の象徴、首里城（那覇市）で出火！

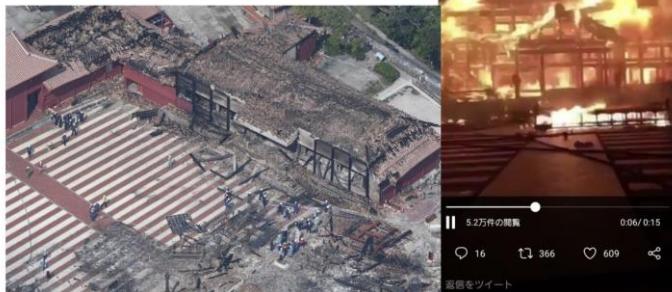


図14 首里城の火災

半年後です。日本でも同じことが起きました。これは沖縄、那覇の首里城。琉球王国という国がありましたが、それまでは日本とはまだ違う国が、あそこには、島津の侵攻まで、あるいは明治、廃藩置県の琉球処分まではあったわけなんですけども、この琉球王国の象徴たる首里城が燃えてしまいました（図14）。炎がありますね。左側も、もう跡形もありません。

もともとどんな形がどんなものが建っていったか。これです（図15）。朱塗りの、琉球王国の、尚家の王様たちが

住んでいたところなんですが、ご存知の通り、これ自体はですね、再建です。沖縄戦で、もう全部破壊されていますから。ただ、この地下には、遺構が残っています。これが世界遺産なんですね。そうとは言ってもですね、この建物が、皆さん

の、琉球の、沖縄の方々のアイデンティティを象徴するものではあったわけなんです。これは朝日新聞のほうに残ってた古い写真ですけども、こういう写真があったから、復元ができたわけなんです（図16）。これ、余談なんんですけどね、これわかりますかね、多分わかりにくいと思いますが、ここに龍の柱があるんですが、実は龍、顔は、こっち、手前を向けてるんですよね。ところがね、さっきの、この龍の顔が、お互いに向かい合ってますね、90度違うんですね、何でこういう復元にしたのか、ちょっとわからないんですけども、ひょっとしたら先ほどの写真が発見される前に、この龍の、建て方は、謎だったのかもしれません。はい。これは余談なんですけれども。

私もですね、これがうちのヘリ飛行機から撮った写真ですけれども、西部本社、福岡に長かったもんですから、一番やはり知っています。大阪の地からですね、こういう全国面に

### 在りし日の那覇・首里城

（世界遺産＝城跡、建物は1992年復元）



図15 在りし日の首里城



### 1世紀前の姿 首里城鮮明に

本社で写真13枚発見

正殿などが焼けた首里城(那覇市)の火災から31日で3カ月。大正～昭和初期に撮影された正殿などの写真13枚が、朝日新聞大阪本社で見つかった。沖縄の戦前の写真は戦争で焼失したものが多い。城内を行き来する庶民の姿を鮮明に写したものもあり、専門家は「生活にじみ始めた首里城の姿を写しており貴重」と話す。写真是1921(大正10)年に撮影された正殿。当時、首里区立女子工芸学校の校舎として使われていて、2階には機織り機のようなものを見る。（伊東聖）▼31面=庶民の生活も

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。  
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

図16 大正から昭和初期の首里城

解説面を書いたことがござります。このようにですね、世界遺産で守られているはずの建物も、時として、火災に遭ったり、<sup>あ</sup>破壊されたりするということがあります。

これも日本の資産ですが、明治日本の産業革命遺産、これは、ちょうど幕末から明治維新後の間ですね、23の資産が、近世の江戸時代、ある意味、いわゆる鎖国の時代から世界に門戸を開いて、それから近代

## 「明治日本の産業革命遺産」

～シリアル・ノミネーションの典型  
反射炉、稼働資産、製鉄炉...  
(全国8県に23資産、2015)



図17 明治日本の産業革命遺産

めの施設がいる。これは、もう上物はなくなっていますけれども、これが、おそらく、こういう形が、ものがあったんだろうということですね。これは、萩の、やはり反射炉ですね。そして、こういうレンガ造りの建物、これは、とても昔の歴史遺産だと思いませんよね。でも、このようなポンプ、官営八幡製鐵所のポンプ地かな。建物は、こう丸っこいアールデコっていうのか、アールヌーボーっていうのか、ちょっと古いめかしい感じですけれども、実際にまだ現役で働いている。こういう、いろんなものを23件集めたのが、産業革命遺産なんですが。はい。他にもありますね、これ普通の工場、これは八幡製鐵の工場です(図18)。でも、どうやら日本で一番古い工場らしいです。ちょっと地味で見栄えはしませんけれども、この鉄骨の梁なんていうのは、ドイツから持ってきてているのですね。これは何となくわかりますよね。いかにも産業遺産、石炭の施設ですね、赤レンガでこういう櫓やぐらが建っています。

これは何か、これは港なんです。三池炭鉱の石炭が積み出された、海の港、港湾施設ですね。これは当然、下から見ると何のことかわかりませんけど、上から見ると、たまたまですけれども、このような鳥のような、ハミングバードといいますけども、ハチドリかな、カワセミかな、そういう鳥の形をしている、とても優美な形で、これも一つの資産になっています。そして、これ、クレーン、これは長崎の三菱重工長崎造船所のクレーンなんですが、巨大ですよね。これ、スクリューです。人が立っているんですけども、豆粒でよく見えないぐらい巨大なものを、実はこれは100年以上前にですね、スコットランドで作られた。今

国家になるという、その遺産をまとめたものです(図17)。

例えば、こういう、この反射炉、鹿児島の反射炉などですけれども、反射炉というのは、大砲を作るときの製鉄所みたいなものです。かなり鉄を溶かしますから、高温にしなくてはいけない、大量の鉄を溶かしますのでね、そのための施設がいる。



図18 カンチレバークレーン、旧八幡製鐵所工場ほか

構成資産のひとつ「軍艦島」  
(長崎市) も国史跡、でも……

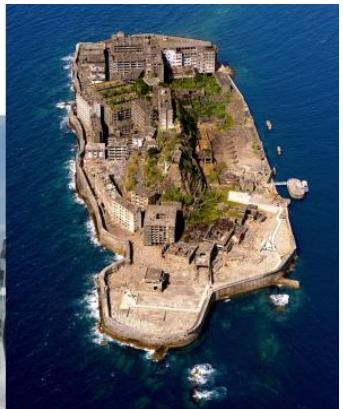


図 19 「明治日本の産業革命遺産」の「軍艦島」

は長崎の端島といいますけれども、長崎の沖合に浮かんでいる、浮かんでいるといいますか、島ですね(図 19)。最初はちっちゃい島でした。ここから石炭が出るよということで、労働者が、こう、船で行ったり来たり、毎日毎日やっていたと思います。あまり毎日やるんだったら、ちょっともうここに住み着いちゃえということで、住み着いちゃう。となると、多分、家が必要でしょう。家ができると、やっぱり家族を呼びたいですよね。家族がいると、やはりアパートも必要だし、子どもさんがいれば、学校も必要。そして、娯楽施設も必要。ということで、どんどんどんどん拡張していった人工の島がこの軍艦島です。これは有名ですから、一番産業革命遺産の、よく象徴のように言われます。

実際は、世界遺産になっているのは、この生産施設と、古い護岸の部分だけなんですけれども、それ以外はやはり国の史跡になっていますので、国の史跡、文化財保護法的な文化財と、それから世界遺産一緒になって、守られている、という島なんですが、これだけの巨大なものを、後世に残していくのか。

実は、その手がかりっていうのはまだまだ見つかっていないんですね。普段は入れないところなんですが、これは確か、東京理科大と芝浦工業大学との調査の時に、私も同行したものなんですが、これ見てください(図 20)。ボロボロボロとコンクリートが落ちてきますし、釘もいっぱいあります。板も散乱していますし、もう危なくてしょうがない。これを止める術っていうのは、今ないんですね。

こちらは、学校です。学校の一番基礎の部分ですね。当然、周りは海ですね、海なので海水がどんどん入り込んでいます。これが基礎、ここ全部海水です。海水で、どんど

も稼動しているのは、世界でも少ないと聞いています。

120年ぐらいかな、この巨大クレーンが、いまだに現役で動いている。これもまた、世界遺産の一つ。

そして、一番有名なのがこの「軍艦島」です。軍艦「土佐」に似ているということで、通称「軍艦島」、正式に

崩壊しつつある軍艦島  
廃墟をどう残すか



図 20 崩壊しつつある「軍艦島」の建造物

ん腐食が進んでいます。もう、もろくなっています。やがて、これが壊れたとき、当然、上の、世界遺産の上物の、多分 10 階建てぐらいだったと思いますが、これはね、一番この部分なんですけどもね、ここから海水が流れ込んでいる。これ、中学校と小学校が一緒になった建物なんですけれども、この大きな建物もおそらく壊れてしまうでしょう。時間の問題だと思います。

そして、これ、これは日本で一番古い鉄筋コンクリートの建物と言われている、30 号アパートなんですけれども、とても頑丈そうですけれども、実はここ壊れちゃっていますね。さっきのスライドで言いますと、この建物、ここらへんちょっと見えにくいと思いますが、まだ綺麗に整っているんですけれども、今、これ壊れちゃっていると。これは、去年のですね、台風 10 号の台風の強風の直撃を受けまして、壊れてしまった。先ほど、いろんな自然災害の例を出しましたけれども、こういう経年劣化、そして海水とともに、台風とか水害とか、そのような、危険性も常にはらん

でいる。しかし、これをそのまま凍結保存して守っていこうという技術はまだ見つかっていません。こんな世界遺産もあるんですね。

一方で、これは広島の原爆ドームです（図 21）。こちらは、手厚く保存されています。保存工事が定期的に行われています。私がすごいなと思うのは、この建物の前に石碑があるんですね。原爆ドーム保存工事、何年、何年、ちょっと見えませんけれども、平成 2 年、それから平成 15 年、それから平成 28 年と書いてあります。このように、保存の工事を全部記録している。この工事を記録するということ自体も、私たちの、その文化資産、世界遺産を守るという一つの記録になっている。これも、また重要な遺産になるんではないのかと思います。

あと、ちょっと時間はありますね。全く違うものをお見せしましょう。これは 10 数年ぐらい前に、フィリピンに行きました。フィリピンのマニラから 10 時間ぐらい車で行きますと、すごい田舎の中に、山の中に棚田が、ライステラスです



図 21 原爆ドームと「原爆ドーム保存工事石碑」

遺産を支える地域社会の衰退  
～コルディリエーラ(フィリピン)の棚田の現実



図 22 コルディリエーラの棚田（フィリピン）

ね、これがバーって広がるんですね（図22）。右側、現地では、「天国への階段」と言われているらしいんですけども、この棚田。私たち主食がお米で、普段田んぼを目にしている日本人にとっては、あまり珍しくないと思うんですけども、やはりパン食とかの欧米系の人たちとか、お米主食以外の人たちから見ると、それはもうすごい田んぼの連なりがあるなと思うらしいんですね。

これはイフガオ族という方々の造った棚田なんですが、実はこの棚田を一つ一つ守っていくには、このように石垣なっていますんで、これをメンテナンスしていくなくちゃならない。これを実際に農家の方々が、毎日毎日、維持をしているんですが、さあ困ったことが起こりましたね。これが危機遺産になってしまいました。なぜか。世界遺産になると、周りにホテルとか、お土産屋さんとか、あるいはレストランとかね、いろんなことができます。それで、農家の後継者たちは、若い人たちが継いでくれるわけなんすけども、これ結構肉体労働ですね、重労働、そしておそらく農家にはそれほど実入りもいいわけではないでしょう。それよりも、やはり周りにできた、ホテルとかね、レストランで働いたほうがお金が儲かるということで、どんどんどんどんそちらのほうに行っちゃった。もともと過疎地ですから、マニラのほうへの流出があったんですけども、それでも、ホテルや観光業が盛況になるにつれて、農家の働き手がいなくなっちゃったんですね。となりまますと、こういうメンテナンスをしてくれる人もいなくなっちゃう。耕して、お米を作る人もいなくなっちゃう。棚田というのは、寂れていいくばっかです。

つまり、世界遺産になったがゆえに、存続が危ぶまれていったという、この皮肉な例として、よく私が出すのがこのコルディリエーラのフィリピンの棚田です。実は、危機遺産からもう脱しています。脱した後にどのようになったか、ちょっとわかりませんけれども、あまり変わりがないんじゃないでしょうか。

これはついでですが、私が泊まったホテルでは、夜な夜な、観光客相手に踊りがあります（図23）。ただ、このようなきらびやかな衣装を着て踊るというのは、おそらく昔は予祝行事とか、あるいは収穫のお祭りとかね、1年でも限られていただけなんですけれども、観光客相手に毎日見せている。お客様は喜びますね。ただ、やはりちょっと一步引いて考えると、これでいいのか

なと思っちゃいますね。つまり、お祭りとかそういう行事を、世界遺産という観光化というものが破壊しているところがあるんじゃないでしょうか。

これはお土産屋さん、お土産屋さんにいらっしゃった、そのおばあちゃんたちですが、こういう特別の服を着ていらっしゃ

ハレの日だった祭りの踊りや衣装も今や毎日。  
観光化の進行で崩れる伝統風習



図23 観光化の進行による伝統文化の変容

います。観光客と一緒に写真を写って、小銭をもらうということなんですねけれども、特別のときに着る服をこんな感じ。毎日毎日着て、お客様を待っているわけなんですねけれども、これもちょっと複雑な気がしますね。なんか、何となく悲しげな顔をされている気が

するんですけど、どうでしょうか。

これは、全く違う例ですね、ウィーンです（図24）。音楽の都、ウィーン。オーストリアの首都、かつてのハプスブルク家、神聖ローマ帝国の帝都ですね。当然、京都と同じような、古い町並みがあって歴史地区がありますけども、実はこれ、危機遺産になつ

### ウィーン歴史地区はリスト抹消されるのか？

ベルヴェデーレ上宮から旧市街方面を眺めると……

画家ベッロットが描いたベルヴェデーレ上宮からの眺め



図24 ウィーン歴史地区（オーストリア）

ています。なぜか。ここに、でっかい高層ビルが建つホテルなんですけどもね、計画されてまして、もうどうなんでしょう、今、建ち始めたのかな。これは、この写真はベルヴェデーレ宮というところから、私が写した写真なんですけども、こちらの、かつて、昔、ベッロットという、カナレットという、そこでは、現地でいいんですがカナレットという画家が何人かいましたね、ベッロットが描いた絵、ちょっと構造は違いますが、これこれですね、この塔はこの塔でしょう、この塔はちょっと見えてないですね、角度違いますけども。かつての画家が描いた芸術作品と同じような風景が残っているんですけども、ここにビルがたくさん建ち始めている。景観が大丈夫かということで、今、危機遺産になりました。

これ、実際にホテルの建設現場のところにかかっていた看板ですが、このようなビルが建つということですね（図25）。さっきのベルヴェデーレ宮というのはここら辺にありますて、逆に見ているところなんですけどもね。なるほど、ここから見ると、こういう高層ビルが建つんだなと。ホテル。実は、こちら、こちらはね、ベルヴェデーレ宮の、さっきの展望台みたいなところがありまして、そこに貼ってあった看板なんですけど、一体何かというと、実は景観の問題は非常に複雑で、それを支持する人、開発には必要だ、いやいや、歴史地区を守るために建てる

### 景観は一変するか？

ベルヴェデーレ宮から眺めた風景の案内板とホテルの完成予想図



図25 ベルヴェデーレ宮と高層ホテル開発

ほうがいいという人、真っ二つに割れています。

どっちかというと、ウィーン市は、開発を後押ししようというほうが大きかったように思います。ところが、それに対してユネスコが異を唱えたということです。それで問題化して議論になっているわけなんですが、これはベルヴ

エデーレ宮から、今の看板の拡大なんですけれどね、数字が振ってあります（図26）。実は建物、近代的な建物に、看板の上に、写真で、数字を振って、こんなにたくさん近代的な建物はすでに建っていますよと。つまり、もうすでにたくさん建っているんだから、もう一本ぐらい建ってもいいんじゃないのかなということを、その開発推進派、これ、市なのかどうかなのかちょっとわかりませんけれども、訴えているようです。なかなか、開発というのは難しいですね。開発のバランスをとるということは。どちらが正しいとも言えない。でも、景観悪化で、このウィーンの歴史地区っていうのは、今、世界遺産から危機遺産状態にあります。

実際に、それが現実になった例があります。これは、イギリスのリバプール、ビートルズで有名なリバプールですね（図27）。港町です。ここで、太陽の落ちない国かな、大英帝国の海運業を支えた港町で、海商都市リバプールという名前で世界遺産登録だったんですが、今年ですね、今年の蘇州会議で、ついに抹消されました。<sup>まつしょう</sup>世界遺産登録の抹消例というのは3件、これを含めて3件なんですけれども、この3例目が今年ついに、リバプールで、世界遺産は外されてしまいました。

なぜか。やはり景観の問題なんですね。これはピアヘッドといってですね、ネオゴシック建築の、ウォーターフロントの目玉の建物ですが、見てわかりますように、このような

今夏の世界遺産委員会で、英「海商都市」リバプールの抹消  
「アラビアオリックス保護区」（オマーン）、  
「ドレスデン・エルベ渓谷」（ドイツ）に次ぐ3例目

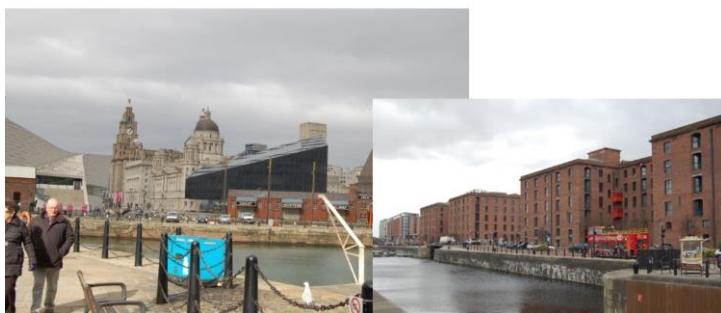


図27 大英帝国の海運を支えたリバプール

### 「すでに近代建築はたくさん立っているんだし……」

wurde der Bereich zwischen dem Belvedere und der Inneren Stadt gebaut. Seit den 1960er-Jahren sind zahlreiche Hochhäuser hinzugekommen.

Canaletto painted his famous view of Vienna from the Octagon Room on the first floor. Because the trees in the neighboring gardens of Palais Schwarzenberg today obscure the entire left side of the city from this vantage point the view closest to the one in Canaletto's painting is from the Belvedere's second floor. While today the Belvedere garden's Baroque design is still by and large intact, the cityscape has changed dramatically. By the nineteenth century, the area between the Belvedere and the Innere Stadt was already exceedingly built up. Since the 1960s, a number of high-rises have been added.

図26 「ウィーン歴史地区」と都市開発

超近代的な建物がたくさん建っています。これがまた景観を阻害するということで、このウォーターフロント再開発が、世界遺産抹消の引き金になってしまいました。こっちはアルバートドックかな、横浜にも小樽にも、こういうところはよく見ますよね。

この都市部の世界遺産の危な

さ、リスクに、こういう景観の問題というのはかなり大きいんですね。ただ、一概にけしからんとも言えないのは、実はこのリバプールという町は有名なんですけれども、人口がかつての最盛期のとき 80 万人ぐらいいましたが、今はもう 50 万人切っています。半分近くくなっちゃっている。イギリスの中でも、失業率が突出して高いんですね。なので、このリバプールの地元の人たちは、市民は世界遺産の恩恵よりも、やはり再開発のほうが経済的に潤うということで、そちらを選んだわけなんですね。いい悪いは言えないんですけども、残念だなという気がします。

ちなみに、ドレスデン・エルベ渓谷、これはドイツ、2 例目の抹消例なんですけれども、こちらは川に、エルベ川に橋を通そうという計画がずっとあります。ユネスコとしては、この橋を通すと景観が壊れるので、それは思いとどまってくれ。いやいやということで住民投票の結果、世界遺産よりも、その市民の利便性が大事だということで、橋が作られてしまった、それで抹消された例です。

これが、さっき政治の介入の問題を言いましたけれども、2015 年、先ほどの産業革命遺産ですね、これを審査した世界遺産委員会がドイツのボンで開かれました。かつての西ドイツの首都ですね、今大学のある、ベートーベンの生まれ故郷です。ここで第 39 回世界遺産委員会がありまして、産業革命遺産が審査されたんですが、私もここにいました（図 28）。

さあ困ったことが起こりました。日韓の泥仕合というものがありましたね。ほぼ、産業革命遺産、問題なく登録されるだろうな、というところに来て、日本もそうだったんです

土壇場まで日韓のつばぜりあい  
会場外には登録に抗議する韓国  
市民団体の姿も



図 29 「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録をめぐる日韓の衝突

「明治日本の産業革命遺産」で日韓の泥仕合  
2015 年、ドイツでの第 39 回世界遺産委員会



図 28 第 39 回世界遺産委員会（ドイツ ボン）

が、同じ委員国の韓国が反対をしたんですね、土壇場で反対した。なぜ反対したか。産業革命遺産の中には、先ほど長崎造船所、三菱重工とか、あるいは官営八幡製鉄というのもあると。軍艦島もそうです。そこで、かつて韓国が植民地時代に、そこで自分の國の人々が、強制労働、この強制というのは、そうなのか、



そうじゃないのかというところは難しいところなんですけれども、強制労働をさせられた、そういう施設を登録するのは、けしからん、ということで、韓国が反対しました。実は、それまでに『手打ち』はできていたんです。ちょうど、今の総理大臣の岸田さんが外務大臣だったころです。韓国と話をまとめたんですけれども、詰めが甘かったんでしょうね。このユネスコの中で、反対しました。

このように、実はカンファレンスセンター、会場の外では、この韓国の方々が、もうこういう小屋を建てて、反対運動、シュプレヒコールを上げているわけですね（図29）。おそらくこの方は、後ろに、三菱の、もし三菱の関係者の方がいたら申し訳ないんですけど、あれが見えるので、うん、多分長崎造船場の関係者の方だと思うんですけどもね。私もここで働くかされたということなのかなどうなのか、とにかく反対しますということで、市民運動の気勢を上げておりました。

結局、新規登録の日というのは3日間あるんですけども、最初の日に審議の予定だったんですが、大もめにもめて、一番最後に、最終日のぎりぎりになって、何とか登録されました。もし登録されなかったら、これはこれで大きなニュースになったはずで

す。議長国ドイツのあっせんもありまして、無事登録されたわけですけれども、大変でした。

こちらはもう結構仰々しく、当時のユネスコ大使とか、この方は青柳さん、文化庁の長官ですね、とか、長崎の知事の皆さんとか、市長さんとか、内閣の参与とかですね、ずらりとホテルで並んで記者会見をしているところです（図30）。我々も、もうどうなる

ことやらということで、私一人ではとても太刀打ちできず、応援が来ました。これはソウル支局の記者、ロンドンのヨーロッパ総局の記者、地元ベルリン支局の記者、そして私を含めて4人で、毎日、夜討ち朝かけをドイツの地でやって、これはようやく終わって、何とか出稿作業が終わって、やれやれと、ビー



軍事クーデターで混乱収まらない  
ミャンマー古都バガンは大丈夫か



図31 バガンの寺院群（ミャンマー）

ルを飲もうとしているところです。かなり明るいんですけども、もう12時ぐらいだと思いますよ。向こうはやっぱり緯度高いですし、サマータイムも実施しているので、結構夜中まで明るいんですね。しかし、もう二度とやりたくないなと。こういう思いもありました。

これもう最後のほうですけれども、これはミャンマーのバガン（図31）。私が行ったときは、この大地に、こういうネギ坊主みたいな寺院がたくさんポンポンポンとあるんですね。それは壮大な景色です。これは朝日です。まだ世界遺産ではありませんでしたけれども、私の行った翌年ぐらいに、世界遺産になりました。でもご存知の通り、今ミャンマーというのは、だいぶ混乱していますね。この政変といいますか、今の状況が、このバガノの遺跡の保護に影響を及ぼさないことを祈るばかりです。

えー、ということでですね、これは後でちょっとお話する機会があるかもしれません。これは、長崎と天草の潜伏キリシタン遺産ですけれども（図32）。ここでも、ちょっといろいろ問題がありましてね、これは大体、今日、皆さんお持ちになっているレジメの中に、私が書いた文章の中にもあります。これ、大体今のスライドというのは、それに従ってお見せしたものですので、後で読んでいただければと思います。この潜伏キリシタン遺産にどんな問題があったのかということも触れておりますので、見ていただければと思います。

2018  
「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

祝・世界文化遺産登録！　でも.....



図32 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

## 「まずは登録を！」ストーリーありき？

- ・世界遺産は1154件（2021秋現在）  
～ちょっと多すぎない？
- ・地元以外、誰も知らない資産の急増
- ・専門家も四苦八苦！？  
.....「登録実現にはわかりやすい紹介を」
- ・ストーリーの単純化と矮小化
- ・その結果、失われたものは.....

図33 岐路に立つ世界遺産

ちょうど時間になりましたので、これはちょっとした宣伝なんですけども、一昨年、私が出した岩波新書の中に、もうちょっと知りたいなと思う方は、詳しく書いておりますので、どうぞ（図34）。

このようにユネスコの条約で守られている、厚く厚く守られているはずの世界遺産も、数々のリスクを抱えている。そして、それを守るためにには、私たち、それを支える市民の力というのが、これら本当に必要になってくるということを、その一端を、いくつか紹介することでお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

#### 【参考文献】

- 中村俊介『世界遺産が消えていく』（2006年、千倉書房）
- 中村俊介『世界遺産－理想と現実のはざまで』（2019年、岩波新書）
- 中村俊介『「文化財」から「世界遺産」へ－考古学ジャーナリズムの視点』（2022年、雄山閣）



図34 中村俊介 2019『世界遺産－理想と現実のはざまで』岩波新書